

(寶曆十年) 四月三日

横山山城守

三六 子弟教養之儀被仰出

御家中之人々、無息之子弟成立肝要可相心得旨、御先代にも被仰渡候通忘却不仕、不覺悟之者には一類等申談、急速加異見、宜成立候様可致候。見合候内悪事於露顯は、父兄一類共可爲越度候。此段可申渡置旨被仰出候。

(寶曆十年) 二月

朱書。同年御用番長九郎左衛門殿諸頭に被仰渡る。

三七 諸士上ゲ米差止候儀觸

御勝手御難澁に付而、拙者共初御家中之面々申談、知行米之内差上置候處、當時人々勝手不如意之節、書上除知井上ゲ米兩様之人々は別而可爲難儀に付、上米之分は從今年被返下候。一統勝手指問候節、知行米之内差上置、御喜悅被思召候。殊に知行當より相増候而上置候面々、暨百石以下之内にも差上置候人々之儀、別而奇特之至被思召候。此段可申聞旨御意に候。

よりは御定之通急度上納可有之候事。

右之趣可被得其意候。以上。

(寶曆九年) 十二月九日

前田駿河守

去暮御用捨之役、出銀上納之儀は、當年に至可申渡旨舊臘申渡置候。其節も申達候通、火災等に付て難澁之事に候處、一時上納にては人々差支可申儀に付、右上納之儀は格別之趣を以、今年より十ヶ年之年賦を以、毎年七月上納可仕候。尤不指支人々は、右年限より指詰上納之儀勝手次第に候事。右之趣可被得其意候。以上。

(寶曆十年) 二月二十日

長九郎左衛門

御家中之人々上納役・出銀之儀、年内申渡候通に候。就夫時節柄才覺等も相調不申、收納米拂候時節にても無之、一統難澁之躰に相聞え候に付、役銀之分は是以後當分七月十日取立、上納可有之候。出銀之儀は、只今迄相定候通可有上納事。右之趣可被得其意候。以上。

右之趣組・支配之面々夫々可申聞候。

御家中書上除知井上米兩様有之人々は、別而勝手難澁之躰に相聞え候に付、今年より知行米指上候に不及旨被仰出候得共、近年御勝手御難澁之上、去年火災後彼是御物入多儀相知候事。且來年は彼是過分之不時御入用も差向候故、今年等右之御沙汰無之様仕度段達御聽候處、其段も御承知被遊候得共、類焼之人々は去年も被返下度被思召候處、其儀不被爲在候。一統難澁之時節、御借用之儀甚御心外被思召候條、右被仰出候通今年より上米仕に不及旨、重而被仰出候。結構成思召、誠以難有御事に候。將又上納銀等も差聞、御費多候旨御算用場奉行申聞候條、上濟無滞、自今借用之品も其了簡可有之儀尤に候事。右之趣可被得其意事。

朱書。右同年十一月廿六日諸頭金谷御殿に御呼出、御用番前田駿河守殿被仰渡る。

三八 御城造營に付人足差出候儀觸

御城御造營被仰付候處、御勝手御難澁至極に付、御要脚必至与御差聞被成候。格別之御普請之儀故、ケ様之節御家中之人々より御借に相成候程差上可申儀候得共、人々難澁之時節故心外之事候。責て少々人足成共御用に相立候様致度、年寄中等申談、類焼無之人々は年中百石に人數十五人充、類焼之者よりは十人充、當分差出候趣に致一決候。然ば右之趣各にも被致承知、組・支配之人々よりも、右割合之圖を以、御歩並以上より差出可然与遂愈議候。割合之趣は別紙之通に候。隱居、儒者、醫者之儀は不申談候間、右之様子致承知、差出度存寄之人々は、尤勝手次第に候。他國在任之醫者等は差出候に不及候事。

(寶曆十一年) 十二月

朱書。同十一年御用番長九郎左衛門殿諸頭に被仰渡る。

御城御造營に付人足指出候割合之事

一、類焼無之人々より、百石に付年中十五人充之圖りを以、知行高に應じ差出可申候事。
一、類焼之人々は、百石に付年中十人充之圖を以、知行高